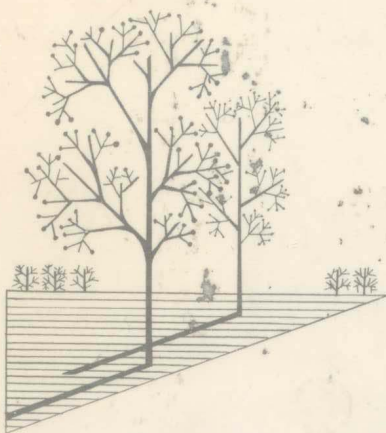


江野沢 成子

ガラスの歌



ガラスの歌

実業之日本社

<著者略歴>

1926年生れ

1947年昭和女子大学卒業

丸紅株式会社勤務（昭和51年9月30日現在）

佐藤春夫・中谷孝雄両先生に師事

同人雑誌「クライテリオン」同人

ガラスの歌

¥1,500

昭和51年10月25日 初版印刷発行

検 印
省 略

著 者 江 野 沢 成 子

発 行 者 神 山 裕 一

制作・発行 実業之日本事業出版部

印 刷 東 京 研 文 社

製 本 共 文 堂 製 本 所

発 売 実 業 之 日 本 社

東京都中央区銀座1-3-9
Tel. 03-562-4311

序に代えて

江野沢さんは先師佐藤春夫の門下であり、私が始めて彼女に逢ったのも先師の応接室でのことであつた。そのとき応接室には私のほかにも二、三の客がいたが、江野沢さんは慎ましく末席に控えて、私たちが先生をかこんで談笑するのを、だまってにこにこしながら聞いていた。まるで童女のようなひと。これがその時の彼女の印象であつた。

私はその後もなんとか先師の応接室で彼女に逢つたが、彼女の印象はいつも変わらず控目で慎ましやかであり、小説など書く人のようにとは思えなかつた。彼女の方でも私たちに書いたものを見せたことはなく、先生にだけ読んでもらっているらしかつた。

私が江野沢さんの作品を読むようになったのは、先生が亡くなられて後、先生の奥さんから江野沢さんのことを見てあげて欲しいというお話があり、その任ではないが、ともかくもお引受けしたので

あった。こうして江野沢さんは私のところへ原稿を持ってくるようになったが、私は決して彼女の作品に朱筆を加えるようなことはなく、いつも参考までに私の読後感をのべるだけのことである。江野沢さんが私の意見にしたがって書き改めたこともなんどかあるが、でき上ったものはあくまで彼女の作品であり、私からは全く独立したものである。

こうして新しい作品がいくつかできたが、江野沢さんには前に佐藤先生から読んでいただいた作品や同人雑誌に発表した小説や随筆なども少くない。それらのなかから意にかなったものだけを選んで、このたび彼女が本書を上梓するに至ったことは私の何よりの喜びとするところであり、地下の先師もさぞお喜びのことであろう。

一見童女のような彼女が、その胸底にどれほどの才情を秘めているか、またそれをどのように現わし得たかは、私がくどくどのべるまでもなく、乞う読者よ、ただちに本書について味読されよ。

昭和五十一年八月二十五日

中谷 孝雄

も
く
じ

序に代えて 中谷孝雄

I 花の章 7

薔薇 9

千の花 29

みね 49

II 海の章 65

太地にて 67

犬 71

ふるさとびと 73

坂上の家 78

晩秋 86

今朝 地下鉄の中では 90

Ⅲ 眼の章 93

ガラスの歌 95

女ともだち 123

さかなの目 157

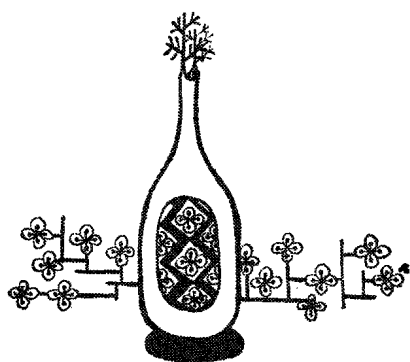
歲月 185

秋の小さな話 213

あとがき 239

装画／中村昌子

I
花
の
章



薔

薇

風が烈しくざわめいて雨が軒端を打った。

すると、その翌日は春のような和やかな日和に恵まれた。何時の間にか寒さは間遠になっていった。寒い一日の次の二、三日は暖かい日が続いた。

そんな日日の或る日、少女は、はからずも垣根の傍の柿の木の下、竜のひげの間から、うす紅い芽を出している一本の薔薇を見付けた。

少女は歓喜した。

「薔薇ならば花ひらかん」

それは、今では、少女にとって一つの祈りであり、強い迷信にまだっていた。

少女が花をより愛するようになったのは、『田園の憂鬱』を読んでからであった。

私は呻吟の世界で

ひとりで住んでいた

私の霊は濫み腐れた潮であった。

ボウの詩句に始まる此の本を読んだのは去年の秋頃であった。

それは難しくてよく分らなかったけれども、「彼」の薔薇に対する愛情とか、心持だけ

は幾分解るような気がした。

丁度その頃、少女の家の薔薇の花は何時からともなく、気が付くと、「病める薔薇」になつていたのであった。

花にはいろいろの思い出がこめられてあつた。

花は田舎の祖父が始めて東京の母の所へ来た時、三越で買い求めたという話であつた。

少女の生まれる前の事であつた。

そして最近、アリスさんに仄かな思慕をさえ寄せ始めていた。

×

×

×

それにしても、あの時の花の美しかった事——あの酷^{はげ}しかった戦のさ中をくぐり抜けて来た事さえ不思議であつた。

とうとう五月二十五日の空襲では、前の家に落ちた焼夷弾で、柿の木は焼けて、地肌は半分棒杭のような醜い姿を曝した。花はそのすぐ下にあつた。

柿の木の少し先に植わっていた若い栗の木——その年、初めて花をつけ始めた——は、殆ど、跡かたもなかった。

それはつい昨日の事のように思われる。

終戦の翌年であつた。

空地はすべて食糧増産に動員された。

芋・麦・菜っ葉……荒れたまぢまぢは緑で掩われた。その上を爽やかな五月の風が吹きわたっていた。

野の花でさえ、こよなく美しい時代であつた。春の夕闇にほんのりと匂いただよう菜の花は、そんな時ばかり、苦しい生活からちよっぴり脱け出させ、淡い夢のような郷愁を人びとの胸にかき立てた。

「——」とうたつた素朴な、古人の感激がその儘、伝わって来るように感じられる事もあつた。

その頃、——五月であつた——垣根に沿つた柿の木の下に一本の薔薇が花ひらいた。駄目だろうと思つた柿の木は、焦げた事が却つて幸いしたように、明るい新緑の葉の間から、クリーム色の花を沢山つけた。空気は甘い花の匂いでみたされた。

牡丹も又、蕾を持った。本当に久し振りであつた。青い萼にきっちりと包まれて花は蕾からでもその立派さが充分思いやられた。誰も柿の木の下に薔薇には殆ど気が付かなかつた。

或る朝、気が付くと、柿の木の下で薔薇が一輪花ひらいていた。

真紅の大輪であった。

五月の太陽の下で柿の木のあい翳が薔薇の花の上で揺れていた。あたりは芳香にみたされた。

花を見ていると、いろいろの虫がやって来た。快い翅音をひびかせてやってくるのは蜜蜂であった。蟻が我がもの顔に花と葉の間を行ったり来たりした。

「ごめんなさい、蜜をどうぞ」

「はいはい、どうぞ」

花を見ていると、実際、そんな会話が想像されたりした。花と蜂との間には、何か、特別の協定が結ばれているように思われた。

少女は何時頃からか——多分その時から——花を愛し始めていた。

×

×

×

花は色や形によって、又大きさによって、つんと取澄ました貴婦人や、あのスピードの女王を思わせたりした。

「何、御用？」私は貴女のような小娘には用事はありませんの、花はそんな身振りをしながら、少女にそっぽを向いているように思われた。あの可憐な野薔薇でさえも少女の指を

傷つけた。

花は美しい代りに棘を持った邪惡な花であった。

「綺麗ですねえ」

「よくこんなに御丹精なさいましたねえ」

まだ隣組制度のあった時代であったから、何かあると、人びとはよく家に來た。母は好んで木戸から入れた。母は庭が得意であった。

狭い庭を植木屋をよんだり、又は自分で数奇にしていた——何時の間にか家人は、旅行へ出掛けた折など、ささやかな母の道楽の為にきまって珍しい石などを持ち帰るよう心遣った——垣根に沿った柿の木の下に薔薇を植えたのも、竜のひげを植えたのも、又、庭との境にそれ等の石を面白く並べたのも皆そんな心持に他ならなかった。實際、新緑の候など、花はあおい柿の木によって一層、美しさが引立った。或る日、母は裏の地主さんのお婆さんと話していた。

「それにしても見事なもんだ」お婆さんは腰を上げながら言った。

「上馬の時からですからね。もうこれでも三度は植えかえていますんですよ」

少女はふと、あれも薔薇ではなかったかと思ひ浮かべた。

夕日が金色に輝いていた。じつとりと汗ばむような晩春であった。上馬の家である。